

音楽科教員養成における知と体験の新たな構築を目指して^{1†}

－「フィールドインターンシップ型授業」及び「ゲーミングシミュレーション型授業」の実践－

佐川 馨・桂 博章*

秋田大学教育文化学部

音楽科教員養成においては、理論と実践の有機的な関連を図り、教員の専門職化の促進に資するための方策を探ることが喫緊の課題である。そのため本研究では、その解決の糸口を本学の平成15年度及び18年度の「特色ある大学教育支援プログラム」の取り組みである「フィールドインターンシップ型授業」と「ゲーミングシミュレーション型授業」に求めた。フィールドインターンシップとは、フィールドワークとインターンシップからなる造語であり、フィールドインターンシップ型授業は、地域観察型学外実習や地域社会での現場研修を含む活動を通して大学教育における「知」と学外における「体験」を再構築し、その成果を地域社会に還元しようとする試みである。ゲーミングシミュレーション型授業は、教室内における授業改善を図る試みとして体験的な活動を行うものである。これらの趣旨に基づき、佐川が部活動指導体験や鑑賞教室の実施による学外実習を取り入れた授業実践を試みた。一方、桂は西馬音内盆踊りの実技体験を中心にした授業実践を試みた。本稿では、音楽科教員養成における知と体験の新たな構築の試みとして取り組んだ、これらの実践の概要と、参加した学生の活動記録及び成果を報告した。

キーワード：音楽科教員養成，フィールドインターンシップ型授業，ゲーミングシミュレーション型授業

1. はじめに

周知のように、平成18年7月の中央教育審議会において『今後の教員養成・免許制度の在り方について²』が答申された。答申では、教員養成における専門職大学院の在り方、教員免許更新制の導入が改革の大きな柱であるとしているが、中でも質の高い教員を養成するための「大学における教員養成の重要性」が改めて指摘されている。そこでは、これまでの教職課程が果たしてきた「質の高い教員養成や戦後の我が国の学校教育の普及・充実、社会の発展等³」についての貢献を認める一方で、以下のこと

を問題点として挙げている。

- ①学生に身に付けさせるべき最小限必要な資質能力についての理解が必ずしも十分ではないこと
- ②専門職業人たる教員の養成を目的とするという認識が教員間で共有されておらず、科目間の内容の整合性・連続性などが不十分であること
- ③講義中心で専門性に偏った授業内容のため、実践的指導力の育成に結び付かず、学校現場が抱える諸課題に対応していないこと

学校教育をめぐる今日的課題に適切に対応していくためには、まず教員養成課程における大学教員の意識改革と積極的な授業改善が求められているのである。

さて、我が国の音楽科教員養成は、明治12(1879)年の伊澤修二らによる音楽取調掛の設置によって始まり、師範学校を経て、第二次大戦後の新制大学へ

2008年1月28日受理

†Toward a New Construction of Knowledge and Experience in Music Teacher Training

－A Case Study of the "Field Internship Type of Class" and the "Gaming Simulation Type of Class"－

*Kaoru SAGAWA and Hiroaki KATSURA, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

と受け継がれてきた。そして、昭和42（1967）年には東京学芸大学に研究能力の高い音楽教師を養成するための大学院教育学研究科が開設され、その後、教員養成系大学における大学院の設置が全国的に進んだことは、音楽科教員養成の研究面の質的な転換を促がし、転機をもたらしたとされている⁴。

しかし研究面が発展する一方で、実践については前述の答申における問題点の指摘のかなり多くの部分があてはまるように思える。ピアノや声楽などの実技が主体となる音楽科教員養成においては、教員養成とはなっていない、音楽大学における専門性の追究を主眼に置いた授業内容や授業方法がそのまま持ち込まれることが多い。それは、実技の向上を重視する傾向にある音楽科教員志望の学生にとってはニーズに適したものとなるが、「専門職業人たる教員の養成」に円滑に繋がるものといえるであろうか。

その背景には明治5（1872）年の学制の発布によって始まった我が国の音楽教育に特有の問題があるだろう。前述の伊藤修二らによる音楽取調掛は、東西両用の音楽を折衷して適当な新曲を制定すべき、という趣旨の下に唱歌教育を推進し国楽育成に邁進したが、和は雅楽のみが重視され、わらべうたや民謡などのその他の日本の音楽は俗楽として切り捨てられ、わずかに西洋の旋律を折衷するにとどまることとなった。音楽取調掛はその後、東京音楽学校として改編され、西洋音楽の専門教育と教員養成を担うこととなったが、以来、日本の音楽教育は、音楽といえば「洋楽」、すなわちヨーロッパ文化圏の伝統を受け継いだ様式や音組織による音楽という状況になったのである。

西洋音楽を急速に吸収しようとする試みは、短期間で西洋音楽を根付かせる一方で、様々な弊害を生み出してきたのである。このことについて降谷⁵は、我が国の音楽教育の抱える根本的な課題は、第1には、音楽をめぐる歴史的背景、音楽観、音楽研究の変遷を捨象して吸収してきたこと、第2には、西洋では統一的に捉えられてきた学問、芸術、音楽を切り離し、模倣を中心として吸収してきたこと、第3には、地域的、時代的に狭い範囲のものを対象として取り扱ってきたこと、その結果として第4には、一般音楽教育の中心的な内容は西洋音楽となり、教育の場では非系統的に日本の伝統音楽を取り扱っていることとしている。

これらの問題点は、教員養成の場においても同様

である。『教育職員免許法』（以下「免許法」）のカリキュラムや必修の単位数などは、時代の要請や学習指導要領に合わせて改訂されてきたが⁶、大学の教員養成における実質的な対応は、学校現場における学習指導要領の改訂や各種答申を受けての改革に較べ、その速度が遅いことは容易に推察されるであろう。すなわち、免許法の改訂はされても、西洋という狭い地域の音楽を取り扱い、その技能を磨くことを主眼とする音楽科教員養成からの転換はされにくい状況にあるといえよう。

そのような状況について、音楽科教員養成にあたる側の立場からも反省と批判の声が上がっている。たとえば森脇⁷は、教員養成の大学・学部の問題の一つとして次のような厳しい指摘をしている。

教員養成の大学・学部の音楽教育が、もしこうした音楽美構成⁸の中だけで終わっているとすれば、それは教員の養成にまでは達していないことになり、その大学・学部で作られた教員は、普通教育を担当する能力に欠けていることになる。つまり大学・学部の教官がそうした大学の目的に添わない専門の教育をしたことになる。

森脇の論考は昭和54（1979）年に書かれたものであるが、20余年を経て幾分かの改善は見込まれるものの、果たして教員側の意識の変革と実践の改善はなされたであろうか⁹。

佐野¹⁰は、前述の答申や森脇の指摘と同様に、大学側の「『専門職』としての音楽科教員を育成するという課題意識の薄さ¹¹」が音楽科教員養成の大きな問題であるとし、その一例として「音楽科における教員養成研究は、量的にも質的にも驚くほど不足している¹²」と指摘している。その上で「学問的な研究及び理論と、教育的実践の『交流』の実現」が専門職化を促進する鍵であるとしている。

これらの論考を踏まえば、音楽科教員養成においては、これまでの実技の向上に片寄った授業内容からの転換とともに、佐野の指摘する専門職化の促進に資するための「学問的な研究及び理論と、教育的実践の『交流』の実現¹³」の場を量的にも質的にも充実させていくことが喫緊の課題といえよう。

そのために本研究では、解決の糸口を本学の平成15年度「特色ある大学教育支援プログラム」の取組みの一つである「フィールドインターンシップ（現

場体験)型授業」及び18年度の「特色ある大学教育支援プログラム」の取組みの一つである「ゲーミングシミュレーション(実技体験)型授業」に求めた。

フィールドインターンシップとは、フィールドワークとインターンシップからなる造語で、フィールドインターンシップ型授業とは、地域観察型学外実習や地域社会での現場研修など、学外での現場体験を重視する取組みである¹⁴。一方、ゲーミングシミュレーション型授業は、教室内における授業改善を図る試みであり、シミュレーション、ロールプレイング、ゲームなどの体験的な活動を行うものである¹⁵。いずれの取組みも知識と体験を一体化する学習展開によって学生の問題解決能力や主体性を育成しようとする試みである。

筆者らは、これらの試みを前述の音楽科教員養成における問題の解決に資するものと捉えた。すなわち、これまでの実技の向上を主眼とした取組みと教育実践の授業の有機的な関連を図ることによって「知」と「体験」の再構築が促がされ、それによって専門職としての音楽科教員養成に資することができると考えた。

以上の考えに基づき、佐川が学校教育課程選修共通科目「教育実地研究」において学外実習を取り入れた授業実践を試みた。一方、桂は課程共通科目「総合演習」において西馬音内盆踊りの実技体験を中心にした授業を実践した。

本稿では、音楽科教員養成における知と体験の新たな構築の試みとして、これらの実践の概要と、参加した学生の活動記録及び成果と実践の意義を報告する。

2. 「教育実地研究」におけるフィールドインターンシップ型授業の実践

2.1 「教育実地研究」の概要

「教育実地研究」は、公立学校を訪問し、①授業観察、②部活動指導体験、③音楽鑑賞教室、の三つの活動を通して教科教育の実践的指導力を体験的に身に付けることを目的とした授業である。

特筆すべき点は第1に、授業観察が体裁の整えられた研究授業ではなく、公立学校の日常的な取り組みを観察できることである。

第2に、教育実習では体験することが難しい部活動指導体験を行うことにより、音楽科教員養成にかかわる補完的な実習プログラムになることである。

そして第3に、音楽鑑賞教室の企画・実施を学生自身の手で行うことである。

この試みは、学内において学んだ音楽教育学、音楽学、作曲法等の理論的学習とピアノや声楽等の技能的学習によって得られた成果を統合して用いる場となり、それらの学習成果の融合によって「音楽科教員としての実践的指導力」が身に付いていくものと考え、特に音楽鑑賞教室の企画実施は、学校音楽のみならず地域の社会教育等における指導力をも育成できる可能性を持ち、地域の音楽文化向上のリーダー的存在となる資質を養うことが期待できるものである。

2.2 授業プロセス

授業のプロセスは図1のとおりである。

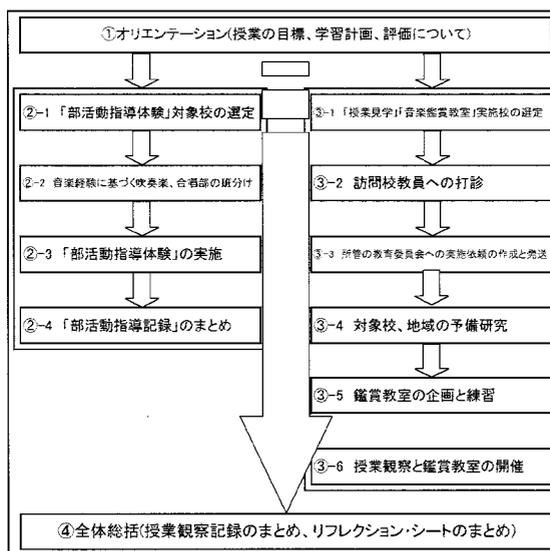


図1 授業プロセス

オリエンテーションでは開講の趣旨、授業目標、学習計画、評価とともに教員から対象校の候補を提示する。対象校の仮決定の後に、担当教員への打診をし、教頭への口頭での説明と了解を得た後に、所管の教育委員会を経由して学校長宛の文書で依頼するという流れをとった。

2.3 部活動指導体験

部活動指導体験は、音楽科担当教員の重要な仕事の一つである部活動を、教える側の立場から捉え実践しようとしたものである。参加学生には音楽系の

部活動で活動した経験を持つ者もいるが、多くは教える側の立場を経験することは初めてである。

実施校は平成18、19年度¹⁶とも秋田大学教育文化学部附属小学校の吹奏楽部、合唱部であった。実施は5月16日から6月6日までの毎火曜日16:00-17:30の計4回である。実施にあたっては、参加学生の音楽経験に基づき、合唱部、吹奏楽部に振り分け、また、協力校の顧問との事前打ち合わせにより、指導にあたって配慮すべきこと、指導内容などについて協議し、活動が円滑に進められるよう支援した。

対象が小学生であったため、「能力の差のある子どもたちがいるグループの中で同じことを教えなければいけないということは難しいと強く感じた (B, 6/6)」「自分の意図を相手に伝えることの難しさを今日改めて感じた (C, 6/6)」「小学生を相手にどこまで教えるべきかが難しい (D, 5/16)」など、教えることの難しさを体験を通して学んだことがわかる。しかし一方では、「言葉をあてはめたところ、子供も興味がわいたようで、進んで新しいリズムに取り組むようになった (E, 5/16)」など、学生自身が子どもの変容を捉え、その上で工夫した手立てによる成果を確認できた例もみられるなど、学内に

おける授業だけでは成し得ない成果を生んだことが分かる (表1)。

2.4 授業観察と音楽鑑賞教室

授業観察と音楽鑑賞教室は平成18年9月12日から13日にかけて行った。実施校と観察授業の題材名等は下記のとおりである。

能代市立常盤小中学校

校長 藤田 良博

音楽担当 宮腰美喜子(小)、平澤 寿枝(中)

授業者と題材名

宮腰美喜子(小)

題材名「ふしのとくちょうを感じ取ろう」

平澤 寿枝(中)

題材名「私たちのフェニックスを羽ばたかせよう」

八峰町立八森中学校

校長 佐藤 重夫

音楽担当 山木 亮

授業者と題材名

山木 亮

題材名「リコーダーの導入」



表1 部活動指導体験の活動記録

月日	パート	指導内容, 児童の姿容, 感想等
5/16	トランペット	腹式呼吸について指導したが, すぐに出来るようになるのは難しいので, 継続して取り組むよう指導した。指導の途中で子供が飽きてしまった。小学生向けの指導を考えなくてはならない。
5/23	トランペット	スーザのマーチを指導した。それぞれバラバラなので, 周りの音を聴いて吹くようにアドバイスしたら音がまとまった。前回の呼吸の練習のせいか吹き方が逆に悪くなってしまった。子供たちは慣れて明るく元気に取り組んでくれた。
5/30	トランペット	『世界に一つだけの花』を指導した。ずっと同じ調子で吹いていたのでメロディーと伴奏部分を吹き分けるように指導した。やはりどのように集中させるかということが課題である。新しいことをやりながらも確実に身に付くようにしようと思ったが, うまくいかなかった。
6/6	トランペット	分奏をし, 周りの音をよく聴くように指導した。全体合奏では突然の指揮でとても緊張した。自分の納得するような指揮は半分もできなかったが, やってみてよかった。
5/16	フルート	技術的に高い子供ばかりで, 進め方もパートリーダーを中心に積極的に取り組んでいた。フルートをはじめてまもない子がいたが, その子に配慮したアドバイス, 進め方ができなかった。次回の課題である。個人的に練習する時間をつくり, 一対一でアドバイスできる場を設けたい。私は吹奏楽のまったくの初心者なので自分の無知を思い知らされた。
5/23	フルート	今日はじっくり時間をとって教えることができたので, 初心者のA子にもゆっくり教えることができた。今まで出なかった低い音が出るようになってうれしそうに笑っていた姿をみて, 私もうれしくなった。今日だけでは教えきれなかったことは, 来週, 指使いのプリントを持っていこうと思う。
5/30	フルート	先週やった下行形の復習を簡単にした後, 上行形の基本の指導をした。しかし4年生はまだできそうになかったので, 下行形の練習を続けた。先週よりだいぶ上手になっていてうれしかった。指使いもだいぶできるようになっていたし, もっと低い音も出せるようになっていた。6年生はほとんど積極的に高い音の練習をしていた。指導の成果が表れつつある。今後もこの練習を続けていきたい。
6/6	フルート	今日は簡単に基礎練習をした後, 合奏のための曲の練習を行った。構成や, もっていき方など, いつもよりやや専門的なことを教えた。しかし4年生がついてこれないようだったので, 基礎練習にもとし, 4年生にしっかりと一度指使いなどを教えた。能力の差のある子どもたちがいるグループの中で同じことを教えなければいけないというのは難しいと感じた。
5/16	合唱全体	自分が予想していた以上に児童の歌のレベルが高く驚いた。先生の指導を見学させていただく中で, 児童に対する工夫やねらいを多く発見できてすごく勉強になった。児童が少しでもスキルアップできるよう手助けを頑張りたい。
5/23	合唱全体	指導前はパート練習の際に拍を数えず, 休符や休符後の始めの音の入り方があやふやな状態であったが, 拍を数えながら入ることも休符の感じ方について指導した結果, 速くなってもらう傾向も見られなくなったし, 休符もしっかり感じられるようになった。今後は, ピアノを用いて正確な音程を身に付けさせたい。児童は, ちょっとした事をアドバイスしたただけで素直に受け取り, 応えようとする。私は指導することに対して少し遠慮してしまっている所があるので, 積極的に指導したい。
5/30	メゾアルト	指導前は半音や離れた音などを歌うと不安定な状態であったが, ピアノで正確な音程を聴いてもらったり, 一緒に歌ったりした結果, パートだけの練習では効果が見られるようになった。しかし全体練習では正確な音程で歌うことはやはり難しいようだった。今後の課題は, より正確な音で歌うことであり, メロディと歌詞との関連をも身に付けさせたい。先週よりも明らかに上手になっていて, 吸収が早いと思った。児童とのコミュニケーションが前よりもよく取れて良かったと思う。
6/6	ソプラノ メゾアルト	グループ練習をしたが, うまく響いていなかったため, お互いの声を聞くようにと指導した結果, 逆に声があり出なくなってしまう。しかし, 前よりも正確な音程でよく歌っているように思った。毎回, 来校するたびに上達していく児童をみて, すごく感心し, 児童の合唱に対しての熱い思いを感じた。自分の意図を相手に伝えることの難しさを今日改めて感じた。
5/16	サクセス	指導前は音階の一つ一つをただ吹くだけであったが, 2音ずつのまとまりで吹けるようになった。音階を全てまとまりで吹けるようになるには運指をきちんと覚えること, しっかりと息を吸ってから楽器を吹くことなどが必須であるので, 今回は息の使い方について指導したい。小学生を相手にどこまで教えるべきかが難しい。小4の女の子にバリトンサクセスは難しいのでは。
5/23	サクセス	先週, 音階の指導をしたバリトンサクセス担当の子供に進歩がみられた。先週は音の一つ一つしか吹けていなかったが, 今日ではちゃんとまとまりとして吹けるようになっていた。低音も先週より吹けるようになっていた。トロロの速い部分のタンギングと指の動きが合っており, テンポを落とすとして練習させたが, 小学生はどうしてもインテンポでやったりが指導に苦労した。
5/30	サクセス	配られたばかりのPop Starの譜読みの手伝いをした。児童はサビの部分しかわからないと言っていたので, 1フレーズずつ区切って吹いてみると, 難しいリズムなどが含まれているにもかかわらず, すごく真似をして吹いていたので, すごいと思った。小学生は吸収が早い。言えばすぐに良くなる子どもたちなのでやりやすかった。
6/6	サクセス	4週連続で初心者のバリトンサクセスの子供を指導してきたが, 最初の頃は比べられないくらい吹けるようになった。バリトンサクセスは低音を出すのが難しいが, 最初の頃よりも出せるようになったし, スーザのマーチもみんなと一緒に吹けるようになっていく姿にとても感動した。
5/16	打楽器	簡単なリズムは出来ていたが, 少し複雑なリズムが出てくると拍が数えられなくなり, 途中で止まってしまうという状態だった。そこで, 分かりやすくするために言葉をあてはめたところ, 子供も興味が行くようになった。進んで新しいリズムに取り組むようになった。今後は言葉を出さずにリズムが体でわかるようにすることが課題である。打楽器を演奏するのは中学校以来だったので, 自分自身が出来るのか, また出来たとしても指導ができるのか, とても心配だった。しかし, 自分が教えてもらったときのことを思い出し, 思ったよりもスムーズに進めることができた。また素直な子供たちで, 人数が少なかつたこともうまく出来た理由の一つである。本来4人のパートだと聞いたので, 次からはそれぞれにどう指導していくのがポイントになると思う。
5/23	打楽器	はじめに二人で合わせて演奏してもらったが, 二人ともスネアのリズムが曖昧な所があった。つまづいたところを取り出して練習した後, ハイハットも合わせて叩かせたところ, 出来るようになった。出来ていても通すや出来なくなるところがあり, 印を付けて集中して練習することを促すと, 自主的に出来ない場所に印を付けるようになった。教え方が一般的なものかと思うが, 集中練習→通しという, 普通の流れしかできなかったことがとても心残りだった。今回はリズムはもちろんだが, 音に関しても少しずつ言えるようにしたい。
5/30	打楽器	初心者で楽譜の読み方や繰り返しの順番を教えると, すぐに理解出来ていた。打楽器だけの技術を磨くより, 音楽的な基礎を教えていけたらと思う。ドラムの曲をもたされたのが初めてだったので, 手本なしでは難しい部分も多くあった。しかし飲み込みが早く, とても教えますかった。今回はドラムセットを使って教えることが出来たので, 児童も分かりやすかつたのではないと思う。いつもの練習の手助けだけではなく, 今回は楽譜の読み方を教えることが出来て, 力になれたと思った。
6/6	打楽器	初心者の子供がいたので, サスバンド・シンバルの使い方を教えた。見本を見せたり, 一緒に打つタイミングなどを練習したりするうちに使い方を覚えてくれた。またロールについては, ロールの基本的な打ち方を全員で練習し, 楽曲の中で現れる譜例とも合わせてさらい, ある程度出来るようになった。しかし, 初心者の子供のロールは不安定で, 構えや姿勢など基礎的なことから教えないといけないと思った。初心者と慣れている児童がいて, 同時にどう教えればいいのかということに悩んだ。初心者の子供に最初手をかけたのが, その間に他のメンバーにどう指示すればいいのか分らなかった。また初心者の子供にもっと教えたい内容があったが, 時間が無く, きちんと教えることが出来なかつたことが残念である。

月日	パート	指導内容、児童の変容、感想等
5/16	全体	ソプラノ担当の子供たちの演奏は表情の変化に乏しく、積極的に伝えるという思いが見えにくかった。音は正確に取れているようなので、周りとブレスを揃えて歌うことなどを教えていきたい。全国大会に出場しただけあって、専門的な内容の指導を受けていた。
5/23	メゾ	中音域でも響きを意識するように指導した。少し出来るようになってはなっていたが、まだ身に付いてはいない。マユを上げるような表情などが無意識に出来るようになれば歌いやすくなるだろう。曲中の半音の部分が難しいので、自分なりに練習して次の指導に臨みたい。
5/30	メゾ アルトと ソプラノ	全体に力んだ感じだったので、リラックスすることにより高音などが出やすくなるよう指導した。ソプラノとアルトの音取りでは、アルトは自信を持って歌っていたが、ソプラノは主力メンバーが欠席で、自信無げに演奏していた。音取りを徹底すれば自信を持って歌うことが出来るのではと思う。指導の際にアルトとソプラノの両パートを弾くことができなかった。また、高音を力まずに出す方法をうまく説明できなかった。次の課題である。
6/6	ソプラノ メゾ	メゾソプラノは、まだ他のパートにつられてしまっていた。自信を持って歌うためにも音取りをたくさんしなくてはならない。こちらで考えていることがあってもどのように話してよいか分からなかった。指導の言葉は重要である。
5/16	ホルン	楽曲練習でリズムが曖昧なところがあったが、1人ずつ確認した結果、よくなった。どの児童も楽曲練習には積極的に取り組むが、構え方など、基礎的なことに課題がある。楽曲練習の楽しさと両立させながら有意義な指導をしたい。
5/23	ホルン	構えと姿勢について指導した。反復練習した結果、大体は身に付いたと思う。今回は事前に勉強していったので、自信を持って指導することができた。そうする理由を合わせて指導するようにした。子供たちも慣れ、固い雰囲気はなくなってきた。
5/30	ホルン	初心者の子供に低音から高音への吹き方を教えるために口の形、息の入れ方、マウスピースでの練習方法などを指導した。楽曲練習の際にリズムが違っているとこがあったが、再三の指摘にもかかわらず改善されなかった。全体に基礎練習をする際には興味を示してくれず、楽曲練習では生き生きとしていた。バランスのとれた練習になるよう配慮する必要がある。
6/6	ホルン	初心者の子供は格段の進歩で、もっと高度な内容を教えていかなくてはと思った。ある程度吹ける子供にはよく音を聴きながら合わせるように指導した。自分自身がセクション練習や合奏に参加することで、みんなで音に関わる楽しさを思い出した。小学生にどの程度まで教えるのかは難しかったが、得がたい経験であった。

授業観察は、小中学校とともに教職経験15年から20年のベテラン教員の授業を観察することができた。いずれの学校においても、日ごろの細やかな指導の成果がうかがえる児童生徒たちの様子と、情熱的で指導力あふれる教員の姿、また豊富な経験に裏打ちされた指導と評価等、学内における授業だけでは学

ぶことのできない体験をしたものと思われる。

音楽鑑賞教室の企画は、「学校の授業では味わうことのできない、音や音楽との新鮮な出会い、感動の体験」という基本コンセプトに基づき、①音楽の楽しさやよさを味わわせる、②文化の継承として伝えるべきものを伝える、③音楽のしくみや楽曲の背景を理解させる、④演奏者自身の持ち味や特技を生かす、⑤ソロやアンサンブルなどの演奏形態を工夫する、⑥プログラムや解説資料、映像など、音や楽曲以外の教材教具の作成と工夫、という六つの計画の視点を設けて準備を行った。

その結果、ピアノ連弾《ルパン三世のテーマ》、ピアノ独奏版（リスト編）《魔王》、トーン・チャイム合奏《主よ、人の望みの喜びよ》、合唱《Hall Holy Queen》、全体合唱《Believe》というプログラムが決定された。これらは、学内における実技系の授業内容を通して身に付けた技能と理論系の授業内容を通して培われた知識、能力を統合して用いる場となった。

2.5 授業後の学生の変容

リフレクション・シート（表2）の事後の欄に示されているように、この取組みを通して参加学生は充実感を味わったことがわかる。実技の向上を主眼とした授業と教育実践的授業の有機的な関連によつての「知」と「体験」の再構築の試みの成果は一定程度確認されたものと思われる。しかし、専門職としての音楽科教員養成に資するためには、成果と課



表2 -学生のリフレクション・シート- (○成果, ●課題)

	事前	事中	事後
A	○限られた時間の中で、臨機応変に準備や練習計画をし、皆がそれぞれ動いていた。余裕はなかったが、何とかしたのは皆の方だと思う。 ●合唱の音取りを早いうちからしっかりとやるべきだった。自分の連弾は調子が悪く演奏内容も思わしくなかった。全体では最終的にどの程度まで仕上げるのか見通しが立たなかった。	○同じ内容の演奏を同日に3回行うのも、合間に授業観察をするのも得がたい経験だった。演奏は、特にトーンチャイムが集中力のある演奏が出来たと思う。出来不出来にかかわらず楽しんで取り組めたことが何よりの収穫だった。授業観察によって先生と子供のつながり、対応の在り方を学んだ。 ●演奏が技術をこなすのに精一杯で中身の乏しいものになっていた。	○無事に終了してよかった。 ●演奏や授業観察について、終了後の早い時期に意見交換などする場が必要だった。
B	○選曲は順調だった。それぞれ積極的に意見を出し合っていた。 ●役割分担をしたが忙しい人と楽な人が出てしまった点は残念だった。私は楽な役割だったが、もっと手伝えるところはサポートするべきだった。準備、練習は全員の日程が合わず、練習時間は不足気味であった。積極的に意見交換することである程度補えたが、時間の余裕があればよりよい仕上がりになっていたと思う。	○当日は遅刻者もなく、計画どおりの出発、到着でよいスタートとなった。百人ほどの児童生徒の前で演奏することは緊張もあり大変だったが、本番は楽しんで演奏できた。心配していたトーンチャイムも本番は完成度が高かった。プログラムの配布、セッティングにとまどう場面も見られ、全体を見通した準備が大切であることを痛感した。	○鑑賞教室も良い経験となったが、それ以上に授業観察が為になった。生の授業を見る貴重な機会であり、授業の進め方、児童生徒への対応は本当に勉強になった。この経験を無駄にしないよう、記入した資料や配布物は大切に保管したい。実地研究の授業計画を配布されたときは最後まで出来るか不安になったが、振り返ると得るものも多く、充実した授業であった。この体験を自分のものに出来るよう頑張りたい。
C	○選曲は授業時間内の話し合いで決めることが出来た。また楽譜の手配など、事前準備は余裕をもって出来た。練習も開始時に練習計画を確認して臨むなど、計画的に進められたと思う。 ●話し合いが脱線することが多く、効率的ではなかった。全員の予定に合わせた練習日程の調整が難しかった。	○鑑賞教室は聴いた生徒たちに楽しんでもらえたようなので、取り組んだ甲斐があった。基本のコンセプトや具体的な視点に沿った選曲で、プログラムのバランスもよかったと思う。 ●2日目は前日の疲れもあり演奏に疲れがみられた。合唱の選曲が自分たちの技術の程度よりも高かったのではないかな。	○撤収作業が早く出来、事故も無く終わった事がうれしい。母校で演奏できたことは何よりの思い出となった。 ●全員で反省する機会を設けるべきだった。前日の夜にはしっか過ぎて次の日に疲れをみせてしまった。
D	○全員で意見交換しながら選曲できた。なかなか全員の予定が合わず、練習時間が少なかった割には完成度の高い演奏ができた。 ●練習日をもっと多くとればよかった。少ない練習日数にもかかわらず毎回遅刻者がいた。	○8人で協力してピアノの演奏やトーンチャイムの準備ができた。八森中では3回の鑑賞教室があり、だらけてしまうのではなかったが、逆に回を追うごとによい演奏となった。授業観察は大変有意義な経験だった。 ●前日の夜更かしは禁物である。	○練習や準備など、夏休み中の取り組みは大変だったが、悔のない演奏、充実した授業となった。
E	○役割分担が早く決まり、仕事の取り組みも積極的になされた。話し合いも活発であり、計画は順調に進められた。 ●反省点は特になし。	○計画した時間どおりに進めることができた。演奏も大きなミスもなく楽しんで取り組めた。お互いの気持ちを高め合い、協力して演奏に向かった。 ●八森中では演奏の回数が多く、やや集中力に乏しい演奏になってしまった。	○会計として役割を果たせたと思う。また、この取り組みを通して学年間のまとまりが良くなったと思う。
F	○限られた時間の中で効率よく練習が進められた。その他の事も順調に計画された。 ●ただ、役割分担は明確であったが、仕事量のバランスは悪かった。	○元気がよく司会ができた。演奏も成功だったと思う。 ●準備に手間取ったときなど、アドリブの話しでつなぐのは難しい。準備をしておくべきだった。	○片付け、撤収は素早くできた。 ●児童生徒と交流する時間を持たなかった。
G	○積極的な意見交換で役割分担、選曲の決定が早かった。練習も計画的に進められた。自分の独奏の練習に誠実に取り組んだ。 ●反省点はなし。	○楽しんで演奏することができた。当日も演奏をよりよくするための意見交換をしながら進められた。演奏終了後も反省や感想を言い合い、次の演奏に生かした。 ●演奏回数が多くなり、やや集中力に欠けてしまった。	○ベテランの先生の上手い授業を見ることが出来てよかった。教える技術も大切だが、教師の魅力やみなぎる力のようなものが重要な要素だと学んだ。 ●終了後の仕事の一部に任せきりになってしまった。
H	○スムーズに話し合いが進んだ。楽譜の入手、楽器の準備も早く、楽しく練習できた。 ●夏休み中の練習計画を立てていたが、集中講義などの関係で予定よりも少ない時間しか練習できなかった。	○八森中では授業の組み立てに隙がなく、生徒の集中力を高めることが上達につながることを実感した。常盤小中学校では教室の掲示物の工夫もされ、子供が自分で発見したことを授業の中に巧みに取り入れながら授業展開していた。	○この取り組みを通して、一人では味わえない他者と合わせる音楽の喜びを味わうことが出来た。

題を精査し、一層の内容の改善を図っていくことが必要である。今後は学生の声も含めた様々な反省点や課題を確認し、この取り組みを継続していきたい。

3. 「ゲーミングシミュレーション型授業」による知と体験の新たな構築

3.1 「総合演習」の授業における「西馬音内の盆踊り」の学習

小・中学校においては「郷土の音楽や芸能」の指導が重要視されるようになってきているが、実技を通して郷土の芸能を指導することのできる教員がほ

とんどいないため、授業で取り上げる際には、映像資料や解説書等に基づいて指導せざるをえないというのが実情である。しかし、身体を通した学習を経ない場合、郷土の音楽や芸能に対して表面的な理解に止まり、また価値意識も形成されず、むしろ逆効果になることもあるのではないかと考えられる。

そこで、本学の教育文化学部の学生を対象に開講されている「総合演習」の分科会で、実際に踊れるようになることを目的に、国の重要無形民俗文化財に指定されている秋田県羽後町の「西馬音内盆踊り」を取り上げた。しかし、担当者自身、「西馬音内盆

踊り」を指導することができず、また受講生が西馬音内に行って盆踊りの担い手から直接指導を受けることも現実には難しいので、平成18年度の「特色GP」によって予算を獲得し、「西馬音内盆踊保存会」を通して会員を実地指導講師として大学に派遣してもらった。受講生は文化の担い手の指導により盆踊りを実地に体験し、また、指導の合間に「西馬音内盆踊り」についての指導者の体験談を聞くことができたが、この項では、それを元に身体を通した学習の効果、及び地域の芸能の担い手による指導の効果を検証する。

西馬音内盆踊りは「音頭」と「がんげ」の2種類の曲から成り、また、踊り方も「音頭1」と「音頭2」、「がんげ1」と「がんげ2」というように、計4種類の踊り方があるが、踊りの難易度、及び時間の制約から、授業では「音頭1」と「音頭2」の指導を行い、また、実地指導講師の指導を受ける前に、NHK制作の独習用のビデオを使って踊りのおよその振りを把握するようにした。なお、分科会での活動は以下の通りで、③と⑤が平成18年度の「特色GP」の予算によるものである。

- ①18年11月9日：盆踊りの解説、ビデオの視聴、独習用の教材ビデオによる学習
- ②18年11月30日：独習用の教材ビデオによる学習
- ③18年12月7日：実地講師による指導
- ④18年12月14日：前週の指導を撮影したビデオの視聴（注意点のチェック）
- ⑤18年12月21日：実地指導講師による指導
- ⑥19年1月10日：着付けの体験、及び実地指導講師による指導

3.2 学習効果の検証－質問紙調査の結果から

最初の分科会で「西馬音内の盆踊り」のビデオを12人の学生に見せた後、7段階の強さの尺度による質問紙調査（4が中央値）を行い、また全ての活動が終了し、盆踊りを踊れるようになった時点でも同じ内容の質問紙調査を行い、両者を比較した。

盆踊りの学習前と学習後の両方において平均点が高かったのは「日本的な踊りである」（学習前6.64点、学習後6.64点）、「美しい踊りである」（学習前6.36点、学習後6.73点）、「繊細な踊りである」（学習前6.36点、学習後6.55点）「上品な踊りである」（学習前6.27点、学習後6.27点）「印象的な踊りである」（学習前6.00、学習後6.45）という質問項目で

あった。

また、学習前と学習後の平均点の差が大きかった質問項目は以下の通りである。

- ・「静的な踊りですか、それとも動的な踊りですか」（「非常に静的」が1点、「非常に動的」が7点、「どちらでもない」が4点、以下同様）
学習前2.64点 → 学習後4.36点
- ・「冗長な動きですか、それともメリハリのある動きですか」
学習前2.64点 → 学習後4.36点
- ・「踊りに乗りの良さを感じますか」
学習前4.45点 → 学習後5.27点
- ・「動きが小さいですか、それとも大きいですか」
学習前4.09点 → 学習後5.00点
- ・「遅い動きですか、それとも速い動きですか」
学習前3.09点 → 学習後3.91点

学習前と学習後の平均点の差が大きい質問は、踊りの動きに関する内容であり、受講生は実地に盆踊りを学習することによって、身体感覚を通して踊りを捉えることができるようになり、学習結果が強化されたように思われる。また、盆踊りに対する価値意識についても、「将来、先生になった時に、西馬音内の盆踊りを子どもに教えたいですか」という質問に対して、平均点が4.91点から6.00点に上がっており、身体を通した学習後には、郷土芸能に対する価値意識も併せて形成されたのではないだろうか。

3.3 授業に対する学生の感想

実際に踊ることによって盆踊りを学習したこと、及び保存会会員による指導についての受講生の感想も全員、肯定的なものであり、以下のような感想が寄せられた。

- ・「見たことのない踊りだったので、すごく楽しかった。感じて、メリハリをつけて踊ることで、自分も楽しくなるのだと分かった。西馬音内についての歴史を調べる機会がなかったので、調べてみたいと思った」。
- ・「同じ秋田県に住んでいながら、羽後町に国指定重要無形文化財の盆踊りがあるということを、この分科会を通して初めて知りました。映像を見たり、実際に踊りを教えてもらったりすることで、西馬音内盆踊りの良さを体全体で感じることで

きました。とても楽しかったです」。

- ・「映像を見て簡単そうに思っていたが、実際に踊ってみると、踊るのが非常に難しいと思った。しかし、練習を重ねていくうちに徐々に踊れるようになってきて楽しかった。今回、この分科会を受講して、盆踊りというものは非常に奥の深いものだと感じた。やはり、長年受け継がれてきた伝統の重みがあると思った」。
- ・「知ってはいたけれど、今まで触れることのなかった秋田の郷土文化に触れることができた。そして、楽しさと新たな興味を持つことができた。初めは踊りが難しく見えたけど、実際に保存会会員の方に教えていただくと踊りが理解でき、『楽しい』と思えるようになった。また、西馬音内盆踊りにまつわるエピソードなどもとても興味深いものであった」。
- ・「初めて伝承者の方に直接、教えて頂いた日に、ビデオを見て練習するのは踊りが身に付く速さが全然、違うと感じた。『総合的な学習の時間』で郷土について学んだり、その他、見学が可能な学習テーマの場合には、直接、専門の方に話を聞いたり手ほどきを受けると良いと思った」。

3.4 郷土芸能の担い手による身体を通した学習の効果

郷土の芸能の学習においては、映像資料を中心とした学習では、当該芸能に対して漠然とした印象を持つに止まり、場合によっては「田舎風である」「年寄りの世代の古い芸能である」といった否定的なイメージを形成することもある。しかし、身体を通した西馬音内の盆踊りの学習後は、美的な面と価値観とが結びつき、踊りの美的側面を基準として、新しく価値観が形成されるのではないかと考えられる。また、学習前と学習後の質問紙への回答の比較からは、身体を通した学習後は動きを一連の流れとして見るようになり、その中にメリハリ、間、律動などを感じるようになり、自分の身体に照らし合わせて動きを測るようになったとも言える。

空間と時間を統合することが難しいという理由から、未経験者が映像のみによって盆踊りの動きを再現することは難しく、受講生も実地講師の指導を受ける前には、複雑な動きを真似することが出来なかったようである。また、重心の位置や体の向き、指の形など、体の細かな動きには目が届かず、実地講師

に習って初めて分かったことが多い。

実地講師の指導を受け、身体を通して学習することによって、郷土の芸能に対する意識構造が初めて組み替えられたのではないだろうか。

4. おわりに

本稿では、音楽科教員養成における知と体験の新たな構築の試みとして、学外における部活動指導体験や音楽鑑賞教室を取り入れたフィールドインターシップ型授業及び学内における盆踊りの実技体験を中心にしたゲーミングシミュレーション型授業の実践の一端を紹介した。

冒頭でも指摘したとおり、音楽科教員養成においては、日本における西洋音楽摂取、またそれに伴う音楽教育特有の歴史的背景に端を発する問題がある。すなわち、西洋という狭い地域の音楽を重視して取り扱い、その技能を磨くことが音楽科教員養成における中核とされていることである。

そのため、筆者らは、本実践で試みたフィールドインターシップ型授業及びゲーミングシミュレーション型授業による、知識と体験の一体化、またその結果としての問題解決能力や主体性育成の試みが、前述の音楽科教員養成における問題の解決に資するものとして取り組んだ。すなわち、これまでの実技の向上を主眼とした取組みと教育実践の授業の有機的な関連を図ることによって「知」と「体験」の再構築が促がされ、それによって専門職としての音楽科教員養成に資することができると考えたのである。

学生の変容からは、この取組みの成果が認められたものの、冒頭で述べた中央教育審議会答申で述べられている、教員養成の問題や音楽科教員養成の諸課題の解決に多少なりとも応えていくためには、まずは更なる試行錯誤が必要であろう。

その第1として、量的な充実を図りたい。教育実地研究は廃止され、学外実習を取り入れた内容は音楽科教育学演習へと引き継ぐが、2学年と3学年の2年間に渡って取り組むカリキュラムとする。また、桂の実技体験を中心とした授業内容は、日本音楽指導法等で取り組んでいく。

第2には、実技系教員との連携による取組みとしていきたい。授業間の有機的な関連を図って行くためにも、複数の教員が連携することが望ましい。また、実技系教員が授業研究や部活動指導体験に参加することによって、教員養成についての課題意識の

共有化が図られるものと思われる。さらには、冒頭で述べた我が国の音楽教育に特有の問題を解決する糸口ともなることが期待できるのではなからうか。

学校教育における子どもと学びのかかわりが見直されているのと同様に、教員養成においても学生と学びのかかわりが問い直されなくてはならないであろう。そのためには、「知」と「体験」、「理論」と「実践」を統合して用いる場の設定を、まずは量的に充実させ、その実践の成果を検証・報告することによって音楽科教員養成研究の質的な改善に貢献していきたい。

[注と文献]

¹ 本稿は、2003（平成15）年度「特色ある大学教育支援プログラム」に採択された「三学部連携による地域・臨床型養成」の取組みのうち、「フィールドインターンシップ型授業」の趣旨に沿うものとして実践し、『三学部連携による地域・臨床型養成事業報告書』に掲載されたものに加筆・修正を加えた。

² 中央教育審議会（2006）『今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）』〈http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06071910.htm〉2008年1月12日。

³ 同上。

⁴ 三好恒明「研究の動向 教員養成における音楽教育」『音楽教育学の展望Ⅱ（下）』日本音楽教育学会編、1991、p.259。

⁵ 降矢美彌子「我が国の音楽教育のかかえる根本的な課題と教員養成」『音楽教育学の展望Ⅱ（下）』日本音楽教育学会編、1991、pp.278-287。

⁶ 丸山妙子は『『音楽』の場合、免許法と学習指導要領は整合性がなかった…中略…平成10年に発表された学習指導要領と、平成12年の文部省令第47号でやっとその整合を見た』と指摘している。丸山妙子「学習指導要領と教育職員免許法にみる教員養成と教育現場の問題点」『東海大学課程資格論集』第4号、2005、pp.35-44。

⁷ 森脇憲三「教員養成大学・学部の音楽教育」『音楽教育学の展望』日本音楽教育学会編、1979、pp.292-306。

⁸ 森脇は「専門教育としての音楽教育を『音楽美構成の中だけにおける教育』とし、普通教育とし

ての音楽教育は『先人の残した価値ある音楽を継承し、新たな価値ある音楽を創造できる人間』を作る基礎教育』であるとして、教員養成の大学・学部における専門教育としての音楽教育への偏りを教員養成の問題の一つとして指摘している（森脇、前掲書、p.293）。

⁹ 森脇は問題の改善を図るためにドイツを初めとした四カ国の教員養成を調査し、調査結果に基づいて福岡教育大学における教員養成の改善の方策を講じている（森脇、前掲書、pp.300-304）。

¹⁰ 佐野靖「音楽科教員養成に期待されるもの—『専門職化』の視点から」『音楽教育の研究—理論と実践の統一をめざして』東京芸術大学音楽教育研究室創設30周年記念論文集編集委員会、1999、pp.340-351。

¹¹ 同書、p.342。

¹² 同書、p.341。

¹³ 同上。

¹⁴ 秋田大学『三学部連携による地域・臨床型リーダー養成』〈<http://www.akita-u.ac.jp/honbu/03resource/gp/pdf/example.pdf>〉2008年1月12日。

¹⁵ 秋田大学『ゲーミング・シュミレーションの概要』〈<http://bonden.is.akita-u.ac.jp/overview/prof02.html>〉2008年2月22日。

¹⁶ 19年度からは「教育実地研究」が廃止されたため、「音楽教育学講義」の授業内容として取り扱った。

Summary

One of the long-standing problems for university pre-service teacher training courses in music has been how to bridge between theory and practice, so participants may develop professional competence. The present paper reports on an attempt to solve this type of problem by employing the approaches expounded by the notions of field-internship and gaming simulation as educational practicum. Both approaches have been accepted by the Japanese Ministry of Education as Good Practice (GP) or the Distinctive Educational Activity program during the years from 2003 to 2006. Field-internship is the term coined by combining two words fieldwork and internship, meaning a type of practice by which

students receive an on-the-job training outside university. By so doing, it is expected that they would make use of it as a chance to put their knowledge into practice. It was further anticipated that such experiences of the students would be returned to the community. Gaming simulation is the instructional method that is intended to help students experience a hand-on job in a simulated classroom setting, whereby they may acquire a type of skill that will readily be usable in authentic situations. Following the principle of these two methods, the present authors conducted pre-service teacher training courses in music. One was concerned with extra-curricular

activities and music appreciation courses as part of community service, while the other was the teaching of a Japanese traditional dance called Nishimonai Bon festival dance. The paper provides detailed accounts of the process of carrying out the courses. The study concludes with several suggestions for the future study.

Key Words : Teacher Training Courses in Music, Field-Internship Courses, Gaming-Simulation Courses

(Received January 28, 2008)